

堀河院の二つの池 － 里内裏の池 －

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

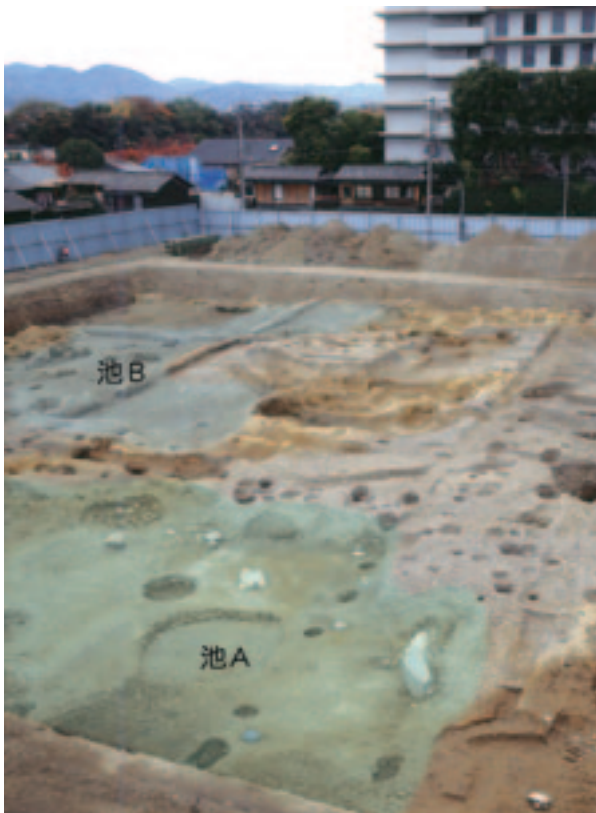


写真1

手前に池A、奥に池Bが見える。(南東から)



写真2

池Aと、北岸付近の土坑の土器出土状況。(北西から)

はじめに 2007年秋、元城巽中学校内の発掘調査で池跡を検出しました。平安京左京三条二坊十町にあたります。9世紀後半には藤原基経邸、10世紀後半には藤原兼通邸となり、円融天皇が内裏火災を避けてここに避難したことから、最初の「^{さとだいり}里内裏」となります。11世紀後半には藤原師実邸となり、白河天皇が利用したことで2度目の里内裏にもなりました。白河天皇は譲位し、上皇として院政を始めるのですが、位を譲られた堀河天皇はこの里内裏を愛用したことから、^{あくりな}諡も「堀河」となりました。

北側の九町は1983年に調査され、池の滝口付近の様子や景石が多数確認されています。池の範囲は南西側に延びると推定されました。そして今回の調査でも、2つの池

跡(池A・池B)を検出しました。それぞれ特色があるため、最初に掘られた池Aから説明します。

池Aのつくり 池は調査区の南端にあります。上には厚い整地層



遺構配置図



写真3

中に粘土の塊が入っている土師器の壺

があり、これを外したところ、景石が据えられた本格的な池であることが判明しました。景石は大小6石以上あり、色々な石種・色調が見られます。チャートの景石は、白色のもの、白色から赤色を呈するものがあり、赤い部分は池の内に向けて据えられていました。粘板岩の景石は淡い緑色をもち、和歌山県紀ノ川沿いに産出する緑泥片岩に似せたと見られます。花崗岩の景石は白色で、上面は平らに成形されています。粘板岩の景石とこの景石は縦に並べられており、船着き場か、あるいは池へ降りる踏み台であったと思われます。

池の底には礎石が並び、池内に建物が及んでいたことがわかりました。寝殿造りの配置で池内に建物があるといえ、それは「釣殿」

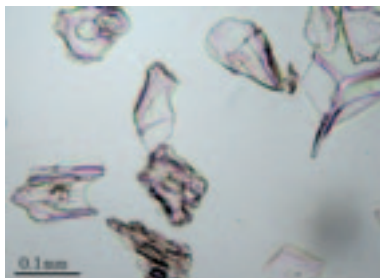


写真6 池底で見つかった火山灰「ピンク火山灰」と呼ばれる約100万年前のものと確認した。



写真4

底に孔を穿った大型の皿

となりますが、そうすると先の2石をまたぐこととなります。そこで2石を池への階段と見ると、建物はそれを覆う^{あずまや}礎石となり、解釈が分かります。

また、この池の底からは、写真2の×印付近から厚さ1cm未満の火山灰の層が見つっています(写真6)。池付近の地表に化粧として利用されたと思われます。

池から出た珍しい器 池の北岸付近で見つかった土坑には、土師器皿が大量に納められていました。上方の皿は完形品が多く、意識的に納めたと思われる。珍しい器形として、小型の壺(写真3)、中心に^{あな}孔を穿った大型皿(写真4)、高台を削った浅い皿(写真5)があります。浅い皿の高台はすべて丁寧に欠き取っています。中心に孔を穿った皿は何に使用したのでしょうか。そのままでは中身がもれるので、実用品とは思われません。酒を一気に飲むための酒盃と見るのはどうでしょうか？

土師器の壺はそれ自体が類例のない珍奇な器形です。内部には土の塊が入っており、塊は舌の形を

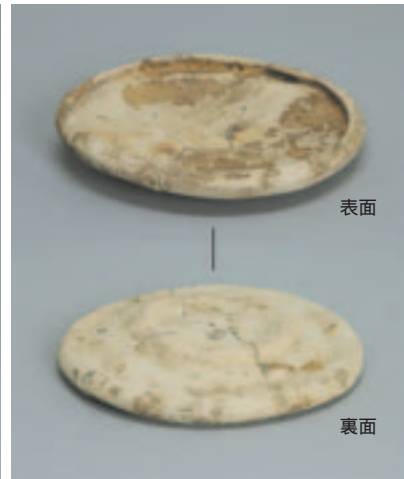


写真5

高台を削ったコースター形の土師器皿

しています。この舌は逆さにしても取り出せず、振るとカラカラと音がするので、楽器のように使われたのか、あるいは内部に香辛料などを入れ、固まるのを防いだのではと思われます。いずれも宴会用の貴重な品々がここに納められたのでしょう。

まとめ 池Aは内部に景石を巡らせた本格的な池で、鳥羽離宮などで見つけている院政期の池に類似します。院政を開始し、鳥羽殿を造営したのは白河天皇、その人です。平安京内の邸宅で造られた堀河院庭園は狭くもあり、さらに壮大な庭園ということで南郊鳥羽が着目されたのだとすると、院政開始の要因には、このような作庭という意図があったのかも知れません。

政治も造営も思いのままに行なった白河天皇でしたが、賀茂川の水、^{さい}養の目、荒法師だけは思いのままにならなかったようです。この池をながめつつ、白河天皇は鳥羽の地に壮大な水閣を想い描いていたのではないのでしょうか。

(丸川 義広)